



家電で安否把握 一人暮らし安心

愛知・三河の山里コミュニティパワー

J A愛知厚生連足助病院の早川富博名誉院長が代表を務める三河の山里コミュニティパワーでは、デジタル技術で中山間地域に暮らす独居の高齢者の健康維持を支援する。

16年には、自宅に設置した人感センサーで、生活パターンを家族が把握して見守れるシステムを構築。家の温度や湿度、照度も測定できるため、熱中症の危険性や睡眠時間を推定することなどができる。

21年からは、電池を使用すると家族がその使用履歴を簡単に見ることができるようになった。例えばテレビのリモコンやセンサーライトに使えば、家電の使用状況で見守ることができ、現在は高齢者を対象にしているが、デジタル技術による地域の持続可能性を探る。

早川名誉院長は「地域に仕事があり、医療、福祉が充実し、助け合い組織がしっかりしていないと、人は移り住んでこない。デジタルはその方法の一つだ」と力を込める。

移住・活性化の切り札

京都大学大学院地球環境学部の鬼塚健一郎准教授の話

過疎化する中山間の集落は、高齢者がほとんどのため、助け合いも厳しくなり、情報通信技術（ICT）は、切り札になる。

自動運転車や遠隔手術など高度な技術が発展すれば、住み慣れた地域に住み続けることができる。技術が発展すれば、どこでも生活することができるようになり、若い人が農村に移住し、地域活性化も期待できる。

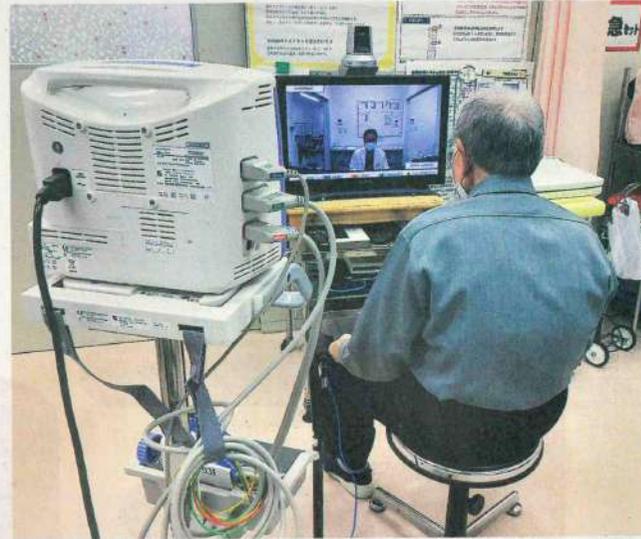
約10年後にはICTを使いこなせる世代が高齢者になる。導入のハードルは下がり、技術をどう使っていくかが重要になる。

デジタル化農村の命つなぐ

生活ナビ

新型コロナウイルス感染拡大で、パソコンやスマートフォンなどで医師の診療を対面しなくても受けられる「オンライン診療」に注目が集まる。人口減少や高齢化が進む農村では、医療提供体制の弱体化や公共交通の利便性の低下が課題だ。感染対策だけでなく、これらの課題解決につながるデジタル化は、安心して地域に住み続けられる手段の一つとなっている。（塩崎恵）

島⇄総合病院 診療はテレビ電話



直線距離で約35*離れた村上総合病院の小出医師のテレビ電話診療を受ける患者（新潟県粟島浦村で=粟島へき地出張診療所提供）

新潟県粟島浦村



日本海に浮かぶ島、新潟県粟島浦村。1959年から無医村となった。本土へは高速船でも

約1時間で、冬は欠航もしばしば。1日に1、2往復の便数も新型コロナウイルスの影響でさらに減っている。

同村は2000年から、粟島へき地出張診療所と島から直線距離で約35*離れたJA新潟厚生連村上総合病院をテレビ電話診療でつなぐ「遠隔テレビ電話診療」が始まった。同村の脇川イツさん（83）は「けがしたとき

や、急に具合が悪くなったときに診てもらえて助かっている。島にいなから先生に診てもらえるので安心して暮らせる」と話す。

週2、3回、同病院の医師5人が交代でテレビ電話で診療をする。診療所には看護師3人がおり、事前に血圧や体温測定、症状はいつから出ているかなど患者から聞き、ファックスで医師に連絡。採血もして病院に送り、検査結果を基に医師は診療する。診療中は医師が言ったことを患者が理解できるように分かりやすく伝える。村の看護師と医師が息を合わせて、診療を円滑に進めている。

村に救急患者が発生したときは365日、24時間いつでもテレビ電話診療で対応する。ただ診療所で行えることは限られる。症状をテレビ電話で確認し、必要に応じて病院に搬送して治療、体調が安定してきたら村でテレビ電話診療にするのが基本。診療する同病院の小出章相談役は「病気がうつらへ、不安な気持ちになる。テレビ電話診療はすばらしい喜ばれている。初療をして、専門医につながる態勢を整えるので、島には総合病院があるのと同じだ」と自信を見せる。

営農

くらし特報

若者・移住

流通

